



みんなく公開講演会 ヨーロッパと日本の宗教 問いなおされる救済のかけこち

藤本 透子
民博 機関研究員

民博は、2006年から毎年春に、毎日新聞社と共催でみんなく公開講演会を開催している。
今回は、ヨーロッパと日本の宗教を、罪と救済、来世と現世などに着目してとりあげた。

宗教を信じますか？

この問いに対して「無宗教」あるいは「信仰をもたない」と答える日本人は、宗教意識調査で七〇パーセントにのぼる。その一方で、神社でお守りを買ったり、お寺にお墓参りに行ったことがない人は、むしろ少ないだろう。

日本では、神仏に対する感覚は、生活のなかでほとんど意識されないまま存在しているといえるかもしれない。しかし、病气や死などの苦難に直面して心のよりどころが真剣に求められるとき、宗教は重要な問題として立ちあらわれる。また、世界に広く目を向けると、イスラームなど宗教への関心が改めて高まっている地域もある。

二一世紀は「宗教の世紀」ともいわれるが、宗教について語ることに一種のタブーがつきまとう。春の講演会では、正面切って論じられることの少ないこのテーマをとりあげ、キリスト教と仏教というきわめて性格の異なる宗教を対比させて、罪と救済、現世と来世、共存などの問題について論じた。

罪と救済

本館の新免光比呂准教授によると、キリスト教は複雑に発展してきたが、教えを大胆に簡略化すると、①原罪→②受難→③復活→④最後の審判という流れになる。この



長崎の万国霊廟長崎観音 (撮影・保坂俊司)

日本人は生と死を深くリンクさせ、決して分離して考えてこなかった。死者の魂の供養を日常生活のなかでも重視し、その存在に畏怖と敬意を惜しまない。死者を重んじて来世を問題とすることは、日本的な仏教のあり方である。

日本の宗教観について、保坂教授は、すべてのものの背後に唯一なる存在（神、仏、あるいは法）が想定されていると指摘し、これを「二元多現教」と名づけた。自然だけでなくモノにすら魂が宿るとされ、すべてを拝み讃えることは大いなるものを讃えることにつながるという思想である。「宗教」は翻訳語なので、こうした日本の状況を反映していない。このため、自らを「無宗教」とみならず人が多いと考えられる。

共存の思想

パネル・ディスカッションでは、大震災以来とびかかっている「絆」ということばについても論じられた。イエスの受難、つま



生神女就寝祭で信者がおこなう罪の告白は、感情のカタルシスともなる。1995年、ニクラ ルーマニア (撮影・新免光比呂)

教えを基盤としながら、キリスト教は、長い歴史のなかで地域や民族とかわりながら、カトリック、正教会、プロテスタントの三つの宗派に大きくわかれていった。

キリスト教の神は、唯一で絶対的な至高の存在であるため、罪を悔い改め救済を求めるに際して、神と人のあいだに媒介となる存在が必要とされてきた。ロシア正教などの正教では、キリストや聖家族を描いたイコンをとおして、人は神と出会う。また、カトリックにおける聖母崇敬や聖者崇敬はよく知られている。プロテスタントでは、こうした崇敬はすべて否定される。神への取りなしはなく、聖書をとおして神に向き合い、賛美歌によって神を讃えるだけである。一方、中央大学の保坂俊司教授によると、仏教の場合は、罪とは他者から押し付けられたり人に与えたりするものではなく、

り十字架の上で人類に代わって自らの身を差し出したイエスの行為が、キリスト者にとっての愛と絆の原点にある。一方、絆という漢字には足を縛るという意味もある。一蓮托生となつて自分の罪でないものを引き受けること、人の苦しみをも引き受けて、自分の身を犠牲にしてみんなを救うことが、絆の仏教的解釈だという。宗教は人と人の共存、さらに人と自然の共存をも可能にしていく思想の源となっていることが、講演会では論じられた。

今回の講演会で、申し込みが定員を大きく上回り会場が満席となったことは、テーマに寄せられる関心の高さを示していた。時間の関係で、より踏み込んだ議論ができなかったことは残念であったが、この講演会は、幅広い視野に立つて宗教への理解を深めるきっかけになったと考えられる。

みんなく公開講演会

「ヨーロッパと日本の宗教」

問いなおされる救済のかけこち

二〇一二年三月一六日、大阪市北区のオーバルホールにて開催。毎日新聞社共催。

【講演】

「ヨーロッパにおけるキリスト教」
——地域・民族・生活の視点から——
新免光比呂 (民博 民族文化研究部)

「日本人の宗教観——多元な共存を可能にする思想とは」
保坂俊司 (中央大学 教授)

※加えて野林厚志 (民博 研究戦略センター) 司会進行
でパネルディスカッションをおこなった。
今回の公開講演会は一〇月二六日 (金) 東京にて、日本経済新聞社共催で開催予定。



正教会の特徴であるイコノスタシスで仕切られた教会の内陣。2010年、ベオグラード セルビア (撮影・新免光比呂)

自分で罪を作り自分で引き受けるという自業自得の考え方が主流である。キリスト教と仏教では、同じ「罪」ということばでも意味が大きく異なっている。

現世と来世
キリスト教では、最後の審判を終えて赴く天国と地獄が来世にあたり、生者は死者の運命に干渉できない。ただし、カトリックには煉獄という考え方があり、供物をそなえると死者の状態はよくなる。また、ルーマニアのように、墓に行つて死者と語り合う文化をもつ地域もあり、ドラキュラの原型であるルーマニアの民間伝承では死者の帰還も語られる。

インドで誕生した仏教はもともと合理的な宗教で、来世の有無は問題にされないが、